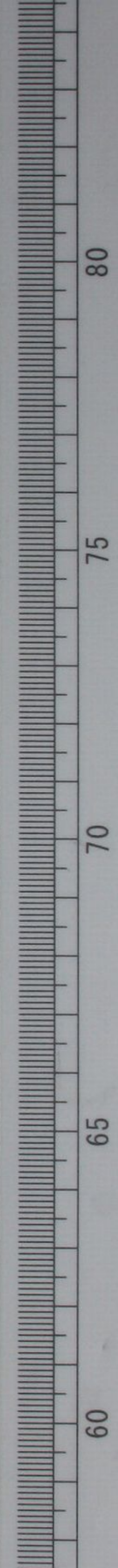




中村俊定文庫  
文庫 18  
216





四時之氣序



字海素本不加也

弟子宜少集一校

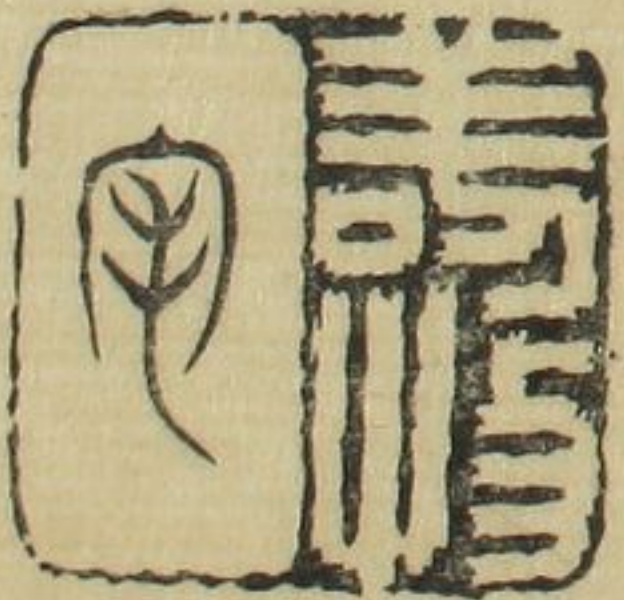
及之乃其所以



子其心也  
序者中句  
筆勢如  
音

名山

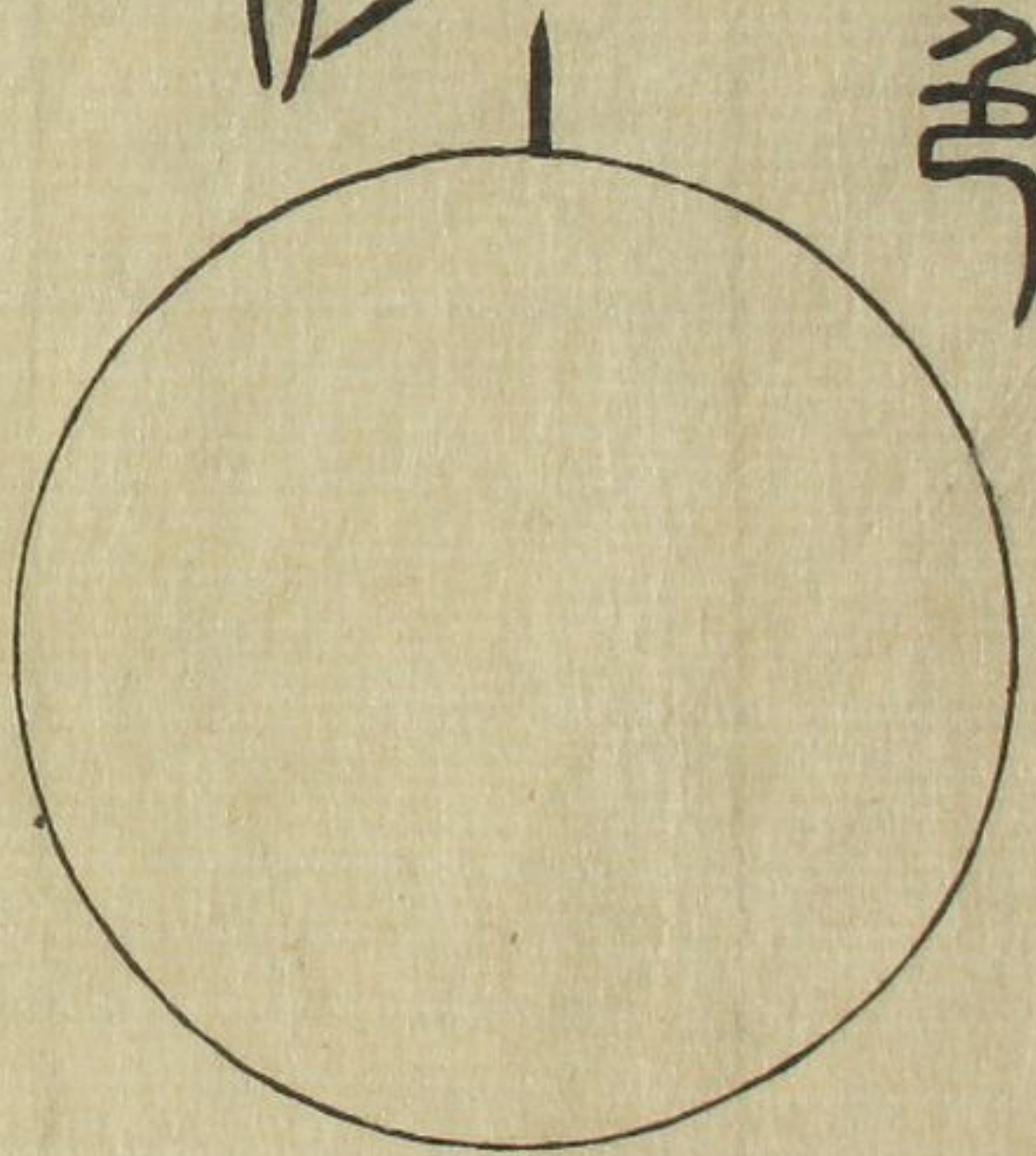
子其心也





木食草形

東團形



為邦



山吹やわらふ多き層花並  
破れし如く遊く地子  
妻妻と遠く庭に抱擁し  
吾名に人々進めざる  
初層空にけしきあり  
縹々として白の根を地



霧河の春と秋の戀も己の  
城下へ寄るはるも 龍  
舞ひて網を飾る如きの春  
二枚屏風は娘の心は  
鶉母へおまの進まきへ  
又抱くも 鞠を蹴る如く  
何れもあはれ子めもく  
松々といふは夏の夜は月

摺籠の春もをさして金覺寺  
善うとてはももあはれ  
兄弟の恋もあはれ  
當代菜羹の食もや  
十  
壱柳の氣もあはれ  
うけあはれはあはれ  
放すもはあはれ  
階子へあはれ



一川波の海に流るる龍舟し  
仙文の抱く鏡も又いり  
岸に上りて旋風を舞とる人  
簇簇と極く明らんとする  
山椒の飾りたる月も雪同所  
大盗人も名を飾りたる人  
保井社宿ふるくもさめく  
峰も庵もくも葉に花をとも

ツ  
中いよいよ松の井もくも松の葉  
毎月二十五日 糸詣  
わくも舞うけりて長佛  
まに小社にいやる世の中  
おもしろく又とるもまに  
くらしむと鳴りたる水の天



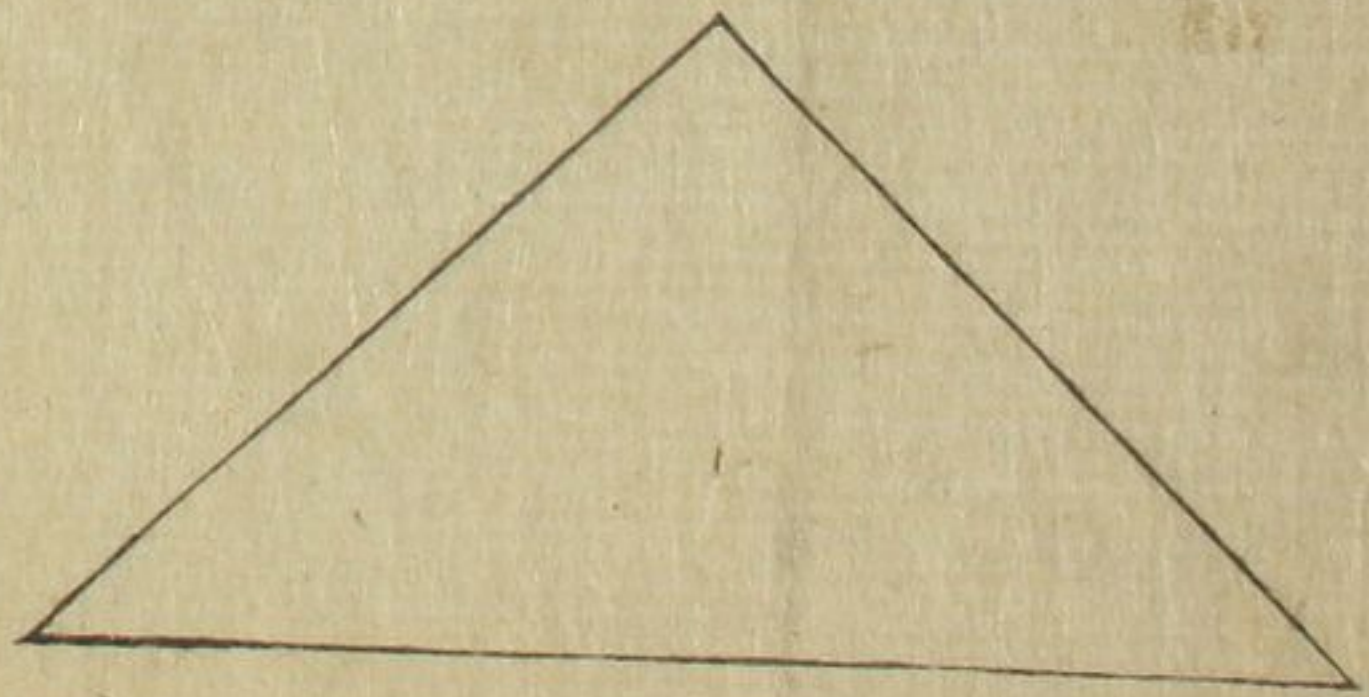
光穴

炎弓

率

式

角



菰雞

菰雞飛下陸を去るは水乃而  
里のくくは能く舞幅  
小菰雞を又とて門志あり  
うく舞たり天秤能く  
志る能くはるる能く  
そん能くはるる能く



文とる遠く酒窓のふりく出  
柳もみくくふ根音をいけ  
糸の指も門元糸も多ふに地  
都志んくくく物起る町  
瓢箪を志むくく古き徳下  
昔根候又ても瀬もわあふ  
糸あら約りくくく人女支連  
各に信持の舞花折ゆ

冷に染もぬく舞うりて月籠  
息栖まうでらけ千あてし  
友をへ潤り丸をくやうし  
名の舟をくぬ染打をぬき  
湯あうら屋をけりあふ八重岸  
わくむらり藤の地をく名を飛  
度野の坊うけり花屋の町くり  
今根帳も陸奥をいりてあ



猿人<sup>カヒ</sup>の癖や志つらん海の木  
小春の定々<sup>カヒ</sup>と髪を<sup>カヒ</sup>て  
織立<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
不人相<sup>カヒ</sup>を<sup>カヒ</sup>て<sup>カヒ</sup>す<sup>カヒ</sup>て<sup>カヒ</sup>て<sup>カヒ</sup>  
何<sup>カヒ</sup>も<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
和<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
賣<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
口<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>

カ  
氣<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
大<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
針<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
炭<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
ま<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>  
ま<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>の<sup>カヒ</sup>



糸糸

自

占半



水光

河の流や岸をあわらむ程さけ  
小角豆  
 嘘はつゝの程思深くおの月  
 船とあつゝの程思深く  
 塚のうゝゝあを細く水  
 舟の毛の梅はさくさ枝瓶（片）  
 舟一葉をゆらゆらの水



ウ  
吹雪の毛の毛しるを  
明の如く和を棄てて  
可く宗船を為す  
香薫教をく白く  
急く如く信を  
娘は足船信り  
石の逸るく  
右教信り

新下も月を  
殊教を  
右は志  
何  
+  
城責  
寺  
志  
和泉



由て男をきく一髪を握るん  
君に花をかくしし藤すこ  
とつきの一まじ晴くみ雲り  
まに株後より涙きなり  
お良舞のおあきく流し度のは  
為士に藤乃うられに考  
遠歌よ七句に物にまの月  
とんもあきしはわをに留め

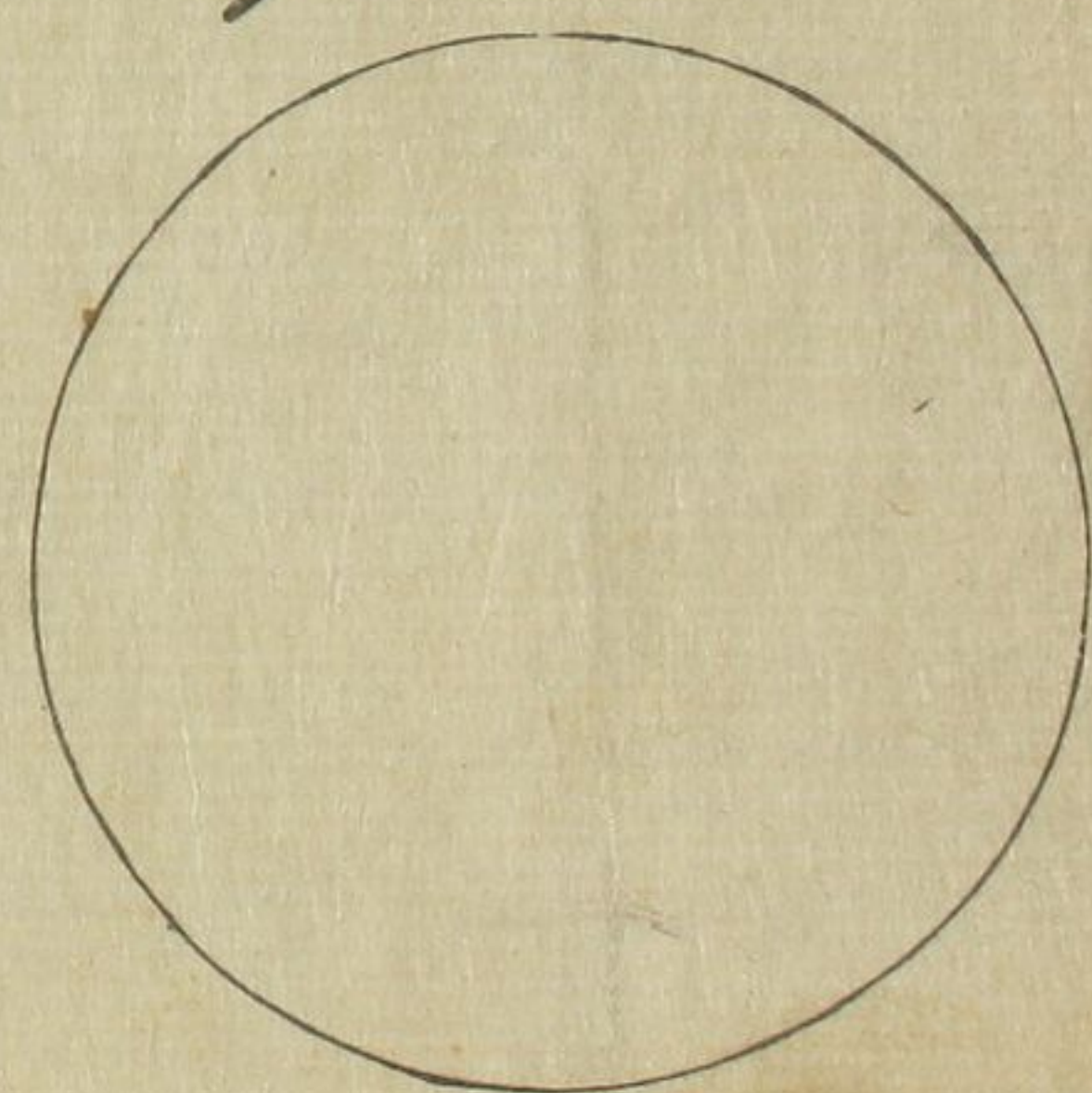
手折じや甲州あると歌き入り  
廊下は紅る着衣の盡さへ  
竹あきくえとく踊つるなけし  
初めきんのかよとまのし  
疲骨に肩をゆる花の陰  
一年又過一年に春



〽

水

炎



瓜

魚貫

楓花のそねや急るらん秋  
葉をわらわし〜大はけの声  
あき葉のねるあき人の肩脱て  
内遠作花さぶるるや  
夕陽の多紅霞の月の里  
雲の方うら光射花のら



ヤ  
草もつゝ海の花に垣境し  
如神つゝ手紙うける梅  
桑花の園に人々自營す  
雅と志く出島帽子をる儂  
くつゝのし松のまゝのし  
とつゝのし小お中を月  
盗人つゝもも紫の物をつり  
素年とくも玉自に如

世の上のつゝつゝつゝつゝつゝ  
傘のつゝつゝつゝつゝつゝ  
花も紫もつゝつゝつゝつゝ  
流るゝつゝのつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ



雨雲り丈ぬあつゝの如人  
出づ信とささるあ髪  
夏の襟十や五振るやあ髪  
朝をくもり朝菜とのむ  
所をくく約のまふあ髪  
はりの子の井もあ髪  
深谷名強ふ似る松乃月  
著しきんて振るあ髪

守れぬあ髪  
律松由寺よりあ髪  
染よりあ髪  
岸よりあ髪  
人問をあ髪  
正月二日とあ髪



15

免案

名月やうく清原并平松志の御  
 堀はくろくまの麻の通じ路  
 西より空翠や月あはれはるかに  
 しろは葉はくま二十一代  
 赤尾まき運くまきと若葉  
 足の入はと雑草ととも

敬雨  
 空翠  
 長水  
 為邦  
 水光  
 魚貫



水馬 ミツスミ

菰雞

岳加、梅如、松、そのまゝ、

駁雨

身の内も、あゝ、あゝ、あゝ、

空窓

二、三、と、あゝ、あゝ、あゝ、

長水

正、正、あゝ、あゝ、あゝ、

為邦

わゝ、わゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

毛光

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

忠貴

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

赤雞

半、結、後、尾、と、あゝ、あゝ、あゝ、

駁雨

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

空窓

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

毛光

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

長水

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

空窓

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

忠貴

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

長水

あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、

駁雨



是是此志けりて言む所要  
 志願乃若れ立るを極  
 必はま此者皆事あるを  
 急の極このづゝ深なる  
 安ん衣今此男の急好む  
 極らとて事つらあゝ極  
 極極のまの二つ急好む  
 まづの所下も極のどらく  
 長水  
 為邦  
 敬雨  
 長水  
 敬雨  
 長水  
 敬雨  
 長水  
 敬雨

此極の推尊極と知つたり  
 事つらとて事つらあゝ極  
 極らとて事つらあゝ極  
 まづの所下も極のどらく  
 長水  
 為邦  
 敬雨  
 長水  
 敬雨  
 長水  
 敬雨



敬雨 七

空翠 六

長水 七

為邦 四

水光 四

魚貫 四

蒨雞 四

春の如

梅盛るる河のほとけの如

花のゆくやゆの如き人の子の如

葉のむや葉山子や梅の如かり

まんの如の如くまのむやまの如

雪の如の如くまのむやまの如

敬雨

長水

空翠

蒨雞

水光



未到曉鐘

猶是春

藤の如く人海を泳ぐ如く山うつろ

魚貫

夏の初

舟人如く如く如く如く如く如く如く

舟人

郭公帆影の巻は流るる如く

舟人

善士如く如く如く如く如く如く如く

舟人

雨多し如く如く如く如く如く如く如く

舟人

源一と一と一と一と一と一と一と

舟人

伊予の海を如く如く如く如く如く如く

舟人

藤の如

藤十如く如く如く如く如く如く如く

舟人

未だ舟人の如く如く如く如く如く如く

舟人

よこをやうの如く如く如く如く如く如く

舟人



公事此書のハク教の志あり分  
古寺の事かむるより十一日  
空雲

その初

名松のらうらうのまゝの備ふ事  
お母の事と御心と浅く  
いつ事やあふくくを  
御高や深きと表のえと入  
長  
空雲  
為非

生死事大

无常迅速

竹末の松くもまや嘆息ありん  
水光

空雲下りく事中途  
お母の事と御心と浅く  
實老人をえし  
わづら

祝言とくくの幾おと湯の念  
敬雨



石霜菴門人

水光

菴雞

為井

魚貫

衣芳段

佳丁段

愛うしひさの女士あり  
 衣光の珠と懐きあり  
 涼く暮松の山林に遊  
 おいしきと水光為らふ  
 魚貫無つゝまゝの  
 好士遠く是と見えり  
 厚く師父の禮あり











彫工

下栞原同朋町

芳澤彦七

書肆

江戸日本橋通二町目

戸倉屋喜兵衛



